

跡見学園女子大学文学部紀要 第五六号 (二〇二二年三月一六日)

国立台湾大学図書館蔵『和漢朗詠集私注』の字音について

A Study of Sino-Japanese Lexical Grosses in *Wakan Roishu* (和漢朗詠集) Owned by the Library of National Taiwan University

加藤 大鶴
KATO Daikaku

一 本稿の目的

国立台湾大学図書館特蔵室には、日本統治期における帝国台北大学時代に購入した膨大な和本が蔵されている。¹⁾ 本稿で取り上げる『和漢朗詠集私注』(以下、私注)はその一冊である。本資料は藤原公任によって編まれたとされる『和漢朗詠集』の注釈書であり、平安期以来貴族を中心とした層に口誦・朗吟された和歌・漢詩の解説書としての性格を持つ。『和漢朗詠集』そのものが漢詩文の入門書として盛んに用いられ実際に発音されたと考えるならば、私注に記された仮名注もまたある時代の発音を反映したものと想定されるのであって、日本語史の資料としてどのような性格を有するものか検討することは許されよう。二〇一九年八月

に本資料を閲覧する機会が得られた記録として、本稿に小さな報告をまとめる次第である。

二 資料について

本資料は本稿の目的に記したとおり台湾大学図書館特蔵室に蔵される(書籍番号一四六七〇、総登録号三三八六三一)。列帖装一冊、四十四丁、半丁八行の体裁で、本文は墨書、朱筆による合点等の書き入れがある他、本文と同筆かと推測される助詞や字音注などが仮名で附されるが、いくつかは本文と異なる墨筆による。その他、書誌学的な特徴は松原孝俊主編・中野三敏監修二〇〇九による解題、一九五頁に詳しい。第一丁に「倭

漢朗詠集私注巻第一」とあるが、実際には注釈部分を除いて本文部分のみが抄出されている。^②序はあるが跋文はない。同問題によれば、「こうした『私注』の本文のみを摘出した本はままだ」とのことである。虫損夥しく判読が難しいところも多く、本稿末尾の「注記付き項目一覧」にも示す如くである。この資料の末尾には「于時永祿七年^{壬申}五月五日書之・／岩屋山／妙楽寺常侍」の奥書と「妙楽密寺」の墨文方印を付す。岩屋山妙楽寺は福井県小浜市にある高野山真言宗の古刹のことであろう。^③『日本古典文学大辞典』（岩波書店、一九八六）によれば、信阿なる僧が応保元年（一一六一）に私注を草したとあり、原態としては六巻になるらしい。前三巻を四季部に、後三巻を雑部として本文に訓点を付し、原題と作者を掲げて語釈を示すとあり、このことは伊藤正義・黒田彰・三木雅博編著一九九七、山内潤三・木村晟・枅尾武編一九八二、柳澤良一編二〇一〇などでも確かめることができる。また諸本については、一四世紀の卷子本のほか、東大国語研究室所蔵室町期写本を代表とする冊子本などがあることが知られる。^④国立台湾図書館蔵本は奥書の永祿七年（一五六四年）という記載から室町期の写本であると分かるが、写本の系統については言及する準備がない。本稿では本資料に現れる字音の仮名音形にかかわる注記類を報告し、その日本語史上の概略的な性格を述べるにとどめたい。

三 注記のある項目について

本資料の本文には『和漢朗詠集』の漢詩が並び、その漢字・漢語に字

音の読みが書き入れられている。それらを整理したものが、本稿末尾の「注記付き項目一覧」である。第三節ではこの一覧から、本資料の日本語史上の性格を考える上で有用なものを取り上げ、分析を行う。

三、一 ㄱウとㄱウにかかわる区別について

歴史的字音仮名遣いの漢音では、基本的に江撰、效撰肴・豪韻、宕撰、梗撰二等韻はㄱウ、通撰東（直音）韻、曾撰蒸・登韻はㄱウとなることが知られている（沼本克明一九八六他）。また、両者がいわゆる才段長音の開合の別として区別されていたのは室町末期頃までと考えられている。本資料でもこの区別はほぼ保たれていると見られる。^⑤傍線を付した例は中国語原音との対応から異例となるものである。なお、本資料ではㄱウ等を表記する際に二字目に「ウ」と「フ」を混用している。

■ㄱウが期待される字

江撰 362絳（カウ）、654項（キヤフ）、349雙（サウ）
效撰 249膏（カウ）、188皓（カウ）、369皓（カウ）、274嶠（カウ）、470藻（サウ）、257棹（タウ）
宕撰 423康（カフ）、216行（カウ）、106匡（キヤフ）、257郷（キヤウ）、654莊（サウ）、274爽（サフ）、758象（シヤフ）、499壤（シヤウ）、741壤（シヤウ）、145釀（シヤフ）、376鼈（シヤフ）、532攘（シヤウ）、391聲（シヤウ）、658洋（ヤウ）、660閭（ラフ）
梗撰 234耿（□ウ）、668勁（キヤフ）、584声（シヤフ）、261彭（ハウ）、274

孟(マウ)、514 魴(マウ)

梗撰庚韻三等字、清韻字は漢音でㄟイ、呉音でㄧヤウ・ㄗウとなるから、668 勁(キヤフ)と584 声(シヤフ)は呉音とみる。效撰は基本的にㄗウとなるが、明母豪韻字は両唇音が主母音に影響してㄧウとなる(有坂秀世一九四一)。208 毛(ボフ)はこれを反映したものであろう。

■ㄧウが期待される字

通撰 325 虹(カウ)、286 叢(ソウ)、276 峯(ホウ)、296 僮(トウ)

通撰東韻の虹(カウ)は異例となる。本文とは別筆による書き入れであり、後代のものか。

三、二 ㄧウ・ㄟウ・ㄧヨウにかかわる区別について

歴史的字音仮名遣いによる漢音では、基本的に通撰東韻三・四等、遇撰虞韻、流撰尤・幽韻はㄧウ、效撰蕭・宵韻はㄟウ、通撰鍾三・四等韻、曾撰蒸三・四等韻はㄧヨウ(ヨウ)となることが知られる(沼本克明一九八六)。このうちㄟウとㄧヨウ(ヨウ)は院政期から共に拗長音となり表記としては混乱するに至るという。曾撰蒸三・四等韻に該当する仮名音形は資料に現れなかった。なお、和語に一例のみレウとリヨウの混乱例(347 愁(ウリヨウ))が見られた。

左記の例では、ㄟウが期待される效撰蕭・宵韻字にㄟウとㄧヨウ(ヨウ)の両用がみられる。後代の別筆かと考えられるものに、00 邵(ゼウ／シヤウ)があった。ㄧヨウが期待される通撰腫韻字にもヨウとㄟウが

みられる。通撰腫韻の686 勇(ユウ)は呉音形と思しい。

■ㄟウが期待される字

效撰蕭・宵韻 248 瑤(エウ)、311 樵(セウ)、698 顚(セフ)、54 韶(セウ)、00 邵(ゼウ／シヤウ)、786 窕(テウ)、222 森(ベウ)、308 搖(ヨウ)、348 腰

(ヨ)、786 竊(ヨウ)、162 招(チヨウ)

■ㄧヨウが期待される字

通撰腫韻 243 重(テウ)、686 勇(ユウ)、114 溶(ヨウ)

いわゆる「割る」音であるㄧウは古くからㄧユウと両様に発音されることがあったようだが、拗長音(jin) 化にからんで表記が混乱していくのは南北朝期に入ってからと推定されている(沼本克明一九八六、二五五頁)。沼本の記述に基づけば、左記遇撰はㄧとㄧウの両様が現れること、これは平安期にも見られることである。流撰はㄧウが多いなかに、651 酉(ユフ)、644 郵(ユフ)、530 膺(ヨウ)などが混入している。303 繡(シウ／シユウ)ではシユウが別筆である。

■ㄧウが期待される字

遇撰虞韻 671 樹(シフ)、695 乳(ジフ)、261 莢(ユ)、237 楡(ユウ)

流撰尤・幽韻 311 優(イフ)、338 九(キフ)、310 楸(シウ)、670 岫(シウ)、348 愁(シウ)、349 袖(シウ)、363 袖(シユウ)、303 繡(シウ／シユウ)、356

酎(チウ)、651酉(ユフ)、644郵(ユフ)、530牖(ヨウ)、00劉(リウ)

この他、唇内入声字ㄗㄘㄨを経て拗長音化したと思しき咸攝葉韻字591撰(セウ)、668捷(シヨフ)などがあった。

三、三 その他

■合拗音

カ行合拗音「クワ」「クキ」「クエ」(濁音とも)のうち「クキ」「クエ」は鎌倉時代後半になると直音表記「キ」「ケ」にほぼ統一されるといえる。本資料でカ行合拗音が確認されるのは、400誇(クワ) 溪母麻韻合二等、209槐(クワイ) 匣母陽韻合二等、308槐(クワク※クワイの誤表記か)、400還(クワン) 匣母陽韻合二等の四例のみである。106匡(キヤフ) 溪母陽韻合三等、271蕙(ケイ) 匣母霽韻合四等は先行研究が述べるとおり、室町時代ではそれぞれ原音に近いクキヤウ、クエイとはならず直音となっている。

■促音化

240三六(リツ) 宮は、喉内入声韻尾字(ㄗㄘㄨ)が後続するカ行音の影響で促音化した例、398入(ジツ) 松は唇内入声韻尾(ㄗㄘㄨ)に無声子音が後続する場合に促音化した例、とそれぞれ考えられる(沼本克明一九八六、二三三～二三七頁)。

■一拍字の長音化

321書(シヨウ) 書母魚韻開三等字は一般的には「シヨ」、227浮(フウ) 奉母尤韻開三等字は一般的には「フ」、674被(ヒイ) 並母紙韻開三等字は一般的には「ビ」であるが、この三例は二拍に伸ばした形を表記する。

■呉音読みの混入

本資料では漢字音は基本的に漢音読みとなっている。^⑦いま清濁字(呉音で鼻音、漢音で濁音となるもの)をいくつか取り出せば、398入(ジツ)、695乳(ジフ)、666軟(ゼン)、264脈(バク)、374枚(バイ)、388枚(バイ)、376毛(ボ)のごとく漢音形となっていることが確かめられる。

しかしわずかに呉音読みの混入も認められる。632期(ゴ)、584声聞(シヤフモン)、275頭目(ツヅク)、449乳(ニフ)、といった例は、『和漢朗詠集』の読みとして慣用されていたことがまずもって推し量られるが、『和漢朗詠集』専修大学図書館蔵建長三年(一二五二)菅長成書写本では「声聞」に声点去声+上声、「期」に声点平声濁とあり、いずれも呉音の声点とおぼしい。また「頭目」(ツモク去声濁+入声)は仮名音注・声点ともに呉音とみて良いだろう。正慶元年(一三三二)校点本でも「頭目」(ツモク上声濁+入声)とあり、専修大学図書館蔵本の読みと本資料の読みを否定しない。本資料の漢字音は音韻史上の時代的な特徴を有しながらも、『和漢朗詠集』そのものの読み癖との関連から論じられる必要があるだろう。^⑧

■ 諸声符読み、その他

222 脆（キ）はゼイとあるべきを諸声符によって取り違えたものであろう。463 抑（キヤフ）はヨクとあるべきを仰（ギヤウ）と取り違えたことよって、257 戎（ジュツ）は戌（ジュ）とあるべきを、323 范（バウ）は茫（バウ）とあるべきを、371 屢（ル）は履（リ）とあるべきを、それぞれ漢字の類似により取り違えたことよって、記したものであろう。162 招（チヨウ）もシヨウとあるべきを超（チヨウ）などに類推することであり違えたと考えられよう。477 獲（ギヤク）はクワクとあるべきところであるが、ギヤクとなった経緯は不明である。

269 酈（テツ／レキ）は厄介である。この字音は広韻に「縣名在南陽…」とする反切「郎擊切」に該当すると考えられるが、その日本漢字音はレキ（来母錫韻開四等）であろう。岩波大系本では「テキ」とする。『和漢朗詠集』正慶元年（一二三三）校点本では「テキ／テツ」、専修大学図書館蔵建長三年（一二五一）菅長成書写本では「テキ」、国会図書館蔵本では「レキ」とある。⁹⁾『和漢朗詠集』の伝授、注釈活動のなかで伝えられた読みであろうと推測される。

四 結語

以上、国立台湾大学図書館蔵『和漢朗詠集私注』の字音の仮名音形について、その特徴を概略した。ここに現れる仮名音形は三、三節で見たような呉音読みの混入や諸声符読みで検討したことからすれば、まずは『和漢朗詠集』写本に見られる仮名音形との比較対照で論じられるべき

ものであろう。その上で、三、一節で見たように㉗ウ・㉘ウの開合の別を保持している特徴からすれば、仮名音形が永祿七年（一五六四）の本文書写と同時期に書き入れられたと考えて齟齬を生ずるものではないといえる。少なくとも江戸期以前の様相を伝えていると考えることに問題はなだらう。また三、二節の検討からは、平安末期～鎌倉期に生じた㉙ウ、㉚ウ、㉛ウの混乱を書写の過程で継承しているとも考えられた。

いずれにしてもこの資料単体から分かることはそう多くはない。本稿のなかで繰り返し触れてきたように、『和漢朗詠集』そのものの読まれ方の伝承と日本語史上の知見との関係のなかで、資料的特徴が定位されるものと考えられよう。以上で、この小さな報告を閉じたい。

注記付き項目一覧

本資料に現れる注記類のうち、主として日本語学的な関心に触れるものを以下に掲げた。漢字音や音便にかかわるものが中心となっている。各項目の頭に示したアラビア数字は川口久雄・志田校注『日本古典文学大系第七三 和漢朗詠集・梁塵秘抄』岩波書店、一九六三に掲げる歌番号に対応する。大系本になく、私注である本資料にのみ存在する場合は「00」と記した。出現箇所については「」に丁数・裏表・行数を記した。その他、別筆による書入や古体の仮名などについては「」に備考として記してある。虫損・汚損等で判読が難しい箇所は□や□などとした。

00	后稷 <small>シヨウキ</small> 〔一ウ七〕	162	招涼 <small>チヨウリョウ</small> 〔九才一〕
00	邵公 <small>ゼウ</small> 〔邵〕字「ゼウ」右傍に「シヤウ」〔一ウ七〕	163	新図 <small>シンズ</small> 〔九才二〕
00	公劉 <small>リウ</small> 〔一ウ七〕	163	臨水 <small>リンシュイ</small> 〔九才二〕
00	爾 <small>ニ</small> 〔一ウ七〕	171	栢欄 <small>ヘイリョウ</small> 葉〔九才七〕
54	韶光 <small>セウ</small> 〔四ウ三〕	172	金鈴 <small>レイ</small> 〔九才七〕
60	翩翻 <small>ホシ</small> 〔四ウ七〕	182	曙雲 <small>ジヨ</small> 〔九ウ八〕
63	遺賢 <small>イ</small> 〔五才二〕	188	皓々 <small>カウ</small> トシテ〔十才四〕
68	魚躍 <small>ヤク</small> 〔五才六〕	208	二毛 <small>ボウ</small> 〔一才三〕
96	攬花 <small>ケイ</small> 〔「字は大系本「瓊」〔六ウ一〕	209	槐花 <small>クワイ</small> 〔一才三〕
106	匡廬山 <small>キヤフ</small> 〔七才一〕	213	別緒 <small>シヨ</small> 〔二才八〕
109	潭心 <small>テン</small> 〔七才三〕	216	行燭 <small>カウ</small> 〔二ウ一〕
109	蘋 <small>ピン</small> 〔七才三〕	217	心期 <small>キ</small> 〔二ウ二〕
114	溶々 <small>ヨウ</small> 〔七才六〕	221	題詩 <small>タイ</small> 〔一一ウ五〕
145	宿釀 <small>シヤフ</small> 〔八才四〕	222	森芒 <small>ペウ</small> 〔森芒〕は大系本「眇茫」〔二一ウ五〕
156	危身 <small>レ</small> 〔八ウ五〕	222	清脆 <small>キ</small> 〔一一ウ五〕
156	故園 <small>エン</small> 〔八ウ五〕	227	浮花 <small>フ</small> 〔二才一〕
160	露簾清瑩 <small>エ</small> 〔八ウ七〕	234	遲々 <small>チ</small> 〔二才七〕
160	風襟瀟灑 <small>キン</small> 〔八ウ八〕	234	耿耿 <small>ケウ</small> 〔二才七〕
162	班婕妤 <small>シヨウ</small> 〔九才一〕	235	燕子 <small>エン</small> 〔二才七〕

- 257 征戎^{セイジユツ}（「戎」字は大系本「戌」（一三三八））
- 257 郷涙^{キョウレイ}（一三三八）
- 256 豊嶺^{ホウ}（一三三七）
- 254 黔中^{カン}（「黔」字は大系本「黔」（一三三六））
- 250 漢皇^{カン}（一三三三）
- 250 李夫人^リ（一三三三）
- 249 冷漢^{レイ}（一三三三）
- 249 金膏^{カウ}（一三三二）
- 248 瑤池^{エウ}（一三三一）
- 243 洛水^{ラク}（一三二六）
- 243 千重^{チウ}（右傍「テウ」濁点（一三二六））
- 243 崇山^ス（右傍「ス」別筆（一三二五））
- 241 怨別^{エン}（一三二四）
- 240 澄々^{テウ}（一三二三）
- 240 三十六宮^{リツ}（一三二三）
- 240 凜々^{リン}（一三二三）
- 240 秦甸^{シン}（一三二三）
- 237 榆柳宮^{ユウ}（一三二一）
- 237 兼葭洲^{ケン}（一三二一）
- 261 棹歌^{タウ}（一三三八）
- 261 辭巢^セ（「辭」字右傍「一」に濁点（一三二三））
- 261 茱萸^{セキ}（「茱」字は大系本「赤」（一三三四））
- 261 旧跡^{セキ}（右傍「セキ」別筆（一三三四））
- 261 彭祖^フ（右傍「ハウ」別筆（一三三四））
- 263 三遲^チ（一三三五）
- 263 餘家^カ（一三三七）
- 264 地脈^{バク}（一三三七）
- 264 李顔^{ネン}（右傍「ネン」「カン」別筆（一三三七））
- 264 五百箇歲^{ハク}（一三三七）
- 268 嵐陰^{ラン}（右傍「ラン」別筆（一四〇三））
- 269 躑躅^{チツ}（一四〇四）
- 270 長生^{セイ}（一四〇五）
- 271 蘭蕙苑^{ケイ}（一四〇五）
- 271 蓬萊洞^ホ（右傍「ホ」「ライ」別筆（一四〇六））
- 274 崑函^{カウ}（右傍「カウ」「カン」別筆（一四〇八））
- 274 蕭瑟^{シツ}（右傍「シツ」別筆（一四〇八））
- 274 雲衢^{クニ}（一四〇八）
- 274 孟賁^{マウ}（右傍「マウ」別筆（一四〇八））

- 311 樵蘇セウソ（右傍「セウ」「ソ」別筆）（二六〇八）
- 310 鷗鵠シヤコ（二六〇八）
- 310 梧楸シヤ（二六〇七）
- 308 揺落ヨウ（一六〇七）
- 308 宮槐クワ（二六〇六）
- 307 空階カイ（二六〇五）
- 303 錦繡キンシウ（二六〇二）
- 302 縑纈カウ（二六〇一）
- 296 家僮トウ（二五〇五）
- 296 閑寂カンセキ（二五〇五）
- 292 薤ガイ（二五〇五）
- 289 燕姬キ（右傍「キ」仮名古体）（二五〇八）
- 286 叢ソウ（右傍「ソウ」別筆）（二五〇五）
- 279 偕老カイ（右傍「カイ」別筆）（二四〇八）
- 279 呼ヨウ（右傍「ヨウンテ」別筆）（二四〇八）
- 276 白駒ク（右傍「ク」別筆）（二四〇二）
- 276 文峯ホウ（右傍「ホウ」別筆）（二四〇二）
- 275 頭目ツ（二四〇一）
- 274 爽籟サウライ（二四〇一）
- 311 優遊ユウ（二六〇一）
- 311 葛稚仙チ（右傍「チ」別筆）（二六〇一）
- 312 吳苑ゴ（右傍「ゴ」別筆）（二六〇二）
- 318 彭蠡レイ（二六〇五）
- 321 書シ（「書」字右傍に別筆にて「シヨウ」）（二六〇七）
- 321 錦機キンキ（二六〇八）
- 323 范叙バン（右傍「バウ」別筆）（二七〇一）
- 325 新虹カウ（右傍「カウ」別筆）（二七〇三）
- 327 思婦フ（右傍「フ」別筆）（二七〇五）
- 335 食ヘイ（二七〇二）
- 338 九月キツ（二七〇五）
- 339 雅琴ガ（左傍「ガ」「キン」別筆）（二七〇六）
- 341 寒霧フ（二七〇八）
- 341 蘋風ヒン（二七〇八）
- 342 馬鞍アン（二八〇一）
- 00 思婦フ（私注書陵部本231に「思婦」とあり）（二八〇三）
- 347 愁ウリ（右傍「ウリヨウ」別筆）（二八〇五）
- 348 辺愁シウ（右傍「シウ」別筆）（二八〇六）
- 348 腰圍ヨイ（右傍「ヨ」別筆）（二八〇六）

- 376 鷺毛^{カボ}〔一九ウ六〕
- ウ四
- 374 枚庾亮^{バイ}（双行部、私注書陵部本254に「枚叟：庾亮」とあり）〔一九ウ四〕
- 371 葛屨^{カッル}〔履〕字右傍に別筆「ク」〔一九ウ二〕
- 369 四皓^{シカウ}〔一九ウ二〕
- 367 凋年^{テラナリ}〔一九オ八〕
- 365 獸炭^{キンタン}（右傍「キン」「タン」別筆）〔一九オ五〕
- 363 臘袖^{シユウ}（左傍「シユウ」別筆）〔一九オ四〕
- 362 絳帳^{カウ}〔一九オ三〕
- 362 緑醕^{シヨ}〔一九オ三〕
- 362 黄醕^{バイ}〔一九オ三〕
- 356 温酎^{チウハ}〔一九ウ五〕
- 356 数盃^{ハイ}（右傍「ハイ」別筆）〔一九ウ五〕
- 354 綿^{メン}〔二八ウ三〕
- 354 簾^リ〔二八ウ二〕
- 353 蹉跎^{サクト}〔二八ウ二〕
- 350 鷄^{ケイ}（右傍「ケイ」別筆）〔二八オ七〕
- 349 兩眉^ヒ（右傍「ビ」別筆）〔二八オ七〕
- 349 雙袖^{サウシウ}（右傍「サウ」「シウ」別筆）〔二八オ六〕
- 376 鶴^{シヤツ}〔二九ウ七〕
- 380 斑女^{ハシロカ}〔二〇オ一〕
- 385 鶴唳^{レイ}〔二〇オ四〕
- 388 霸^ハ〔二〇オ八〕
- 388 枚^{サイ}〔二〇オ八〕
- 389 胡塞^{ソク}（右傍「ソク」別筆）〔二〇オ八〕
- 391 聲^{シヤウ}〔二〇ウ三〕
- 391 竜領^{カン}〔二〇ウ三〕
- 398 入松^{ジツ}〔二一オ三〕
- 400 往還^{クワン}〔二一オ六〕
- 400 誇尚^{クワス}〔誇〕字右傍に「ホコル」〔二一オ五〕
- 407 崎嶇^{キク}（右傍「キ」は仮名古態）〔二一ウ三〕
- 408 淮王^{ワイ}〔二一ウ四〕
- 411 紫蓋^{カイ}〔二一ウ六〕
- 412 清漪^イ〔二一ウ八〕
- 423 嵇康^{ケイカ}〔二二ウ三〕
- 424 錯午^{サウ}〔二二ウ四〕
- 433 迸筭^{ヘイ}〔二三オ三〕
- 436 百圍^{ハク}〔草〕字は虫損）〔二三オ七〕

- 449 性〔二三ウ八〕
- 449 乳ス〔二三ウ八〕
- 458 一穂スハ〔二四オ六〕
- 462 霓裳〔二四ウ二〕
- 463 掩抑ス〔二四ウ四〕
- 470 浮藻〔二五オ三〕
- 472 言語ハ〔二五オ五〕
- 477 獲麟〔二五ウ二〕
- 482 生計〔二五ウ七〕
- 489 王勣郷〔右傍「キ」は仮名古体〕〔二六オ五〕
- 499 土壤〔二六ウ五〕
- 508 迅瀨〔ジ〕の濁点は後補か〔二七オ五〕
- 511 杜若〔ジ〕の濁点は後補か〔二七オ八〕
- 514 舳舻〔二七ウ二〕
- 530 危牖〔二八ウ二〕
- 532 瀼々タリ〔二八ウ四〕
- 541 雲碓〔二九オ二〕
- 550 潁水〔二九ウ二〕
- 565 碧毯〔三〇オ七〕
- 567 山畦ハ〔三〇オ八〕
- 568 蕭索〔三〇ウ一〕
- 584 声聞〔三一オ五〕
- 591 引棋〔三一ウ三〕
- 613 泰適〔三二ウ五〕
- 619 桂楫〔楫〕字は大系本「楫」〔三三オ三〕
- 632 期遙〔三三ウ七〕
- 644 郵船ハ〔三四ウ一〕
- 651 己酉〔三四ウ七〕
- 654 項莊〔右傍「キ」は仮名古体〕〔三五オ四〕
- 658 洋々〔右傍に「タ、ヨウ」〕〔三五ウ一〕
- 660 崑閬〔三五ウ二〕
- 666 庫車〔三五ウ八〕
- 666 軟輦〔三五ウ八〕
- 668 勁捷〔三六オ二〕
- 669 昇湖〔昇〕字は大系本「鼎」〔三七オ四〕
- 670 梧岫〔三七オ四〕
- 671 瓊樹〔三七オ五〕
- 674 帛〔三七オ八〕

752	咎犯 <small>キロフシ</small> 〔四〇ウ七〕
742	残 <small>ノコ</small> 〔四〇オ七〕
741	黄壤 <small>シヤウ</small> 〔四〇オ六〕
710	衛子夫 <small>エ</small> 〔三九ウ四〕
698	顚 <small>セン</small> 顚 <small>スイ</small> 〔三九オ二〕
698	辛勤 <small>ギン</small> 〔三九オ二〕
696	謁 <small>エツ</small> 〔三八ウ〕
695	乳 <small>ジュ</small> 〔三八ウ〕
686	武勇 <small>ブユウ</small> 〔勇〕字右傍に「イタム」〔三八オ五〕
686	虎牙 <small>カ</small> 〔三八オ五〕
685	蔡征虜 <small>リョ</small> 〔三八オ四〕
685	潁水 <small>エイ</small> 〔三八オ四〕
680	袁司徒 <small>エンシト</small> 〔三七ウ七〕
679	漢聘 <small>ヘイ</small> 〔三七ウ七〕
679	嚴陵瀨 <small>アイン</small> 〔三七ウ六〕
679	殷夢 <small>イン</small> 〔三七ウ六〕
675	戚子 <small>セキ</small> 〔右傍「キ」は仮名古態〕〔三七ウ二〕
674	汲黯 <small>アイン</small> 〔三七ウ一〕
674	布被 <small>ヒイ</small> 〔三七オ八〕

753	磧礫 <small>セキレキ</small> 〔右傍「キ」は仮名古態〕〔四〇ウ八〕
755	驚駘 <small>ドタイ</small> 〔四一オ二〕
758	象外 <small>シヤウ</small> 〔四一オ五〕
762	三閭 <small>リョ</small> 〔四一ウ一〕
783	瞻望 <small>セン</small> 〔四二ウ一〕
785	夫婿 <small>シヨ</small> 〔婿〕字は大系本「聿」〔四一ウ二〕
786	窈窕 <small>ヨウテウ</small> 〔窈〕字は大系本「娘」〔四一ウ三〕

（参考文献）

- 有坂秀世一九四一「『帽子』等の仮名遣いについて」文学一七年七月、『国語音韻史の研究（増補新版）』三省堂一九五七所収
- 伊藤正義・黒田彰・三木雅博編著一九九七『和漢朗詠集古注釈集成第一巻』大学堂書店
- 井上正一九八四「古仏巡歴24 福井・妙楽寺聖観音立像」日本美術工芸五五〇
- 太田次男一九六六「釈信救とその著作について・附・新楽府略意二種の翻印」斯道文庫論集五
- 柏谷嘉弘一九八七『日本漢語の系譜―その撰取と表現―』東苑社
- 沼本克明一九八六『国語学叢書10 日本漢字音の歴史』東京堂出版
- 松原孝俊主編・中野三敏監修二〇〇九『國立臺灣大學圖書館典藏日文善

本解題圖録』國立臺灣大學圖書館

三木雅博一九八五「『和漢朗詠集私注』の変貌―平安末期から室町期にかけての『和漢朗詠集』写本の動向と関連して」梅花女子大学文学部紀要国語・国文学篇二〇

柳澤良一編二〇一〇『石川県立図書館蔵川口文庫善本影印叢書2和漢朗詠集私注・文筆問答鈔』勉誠出版

山内潤三・木村晟・桝尾武編一九八二『新典社叢書10和漢朗詠集私注』新典社

山下立一九九六「福井県妙楽寺の懸仏について」史迹と美術六六・八

注

(1) 二〇〇〇年度の蔵書調査では和本二万二千冊以上が確認されたという(松原孝俊主編・中野三敏監修二〇〇九、八頁)。

(2) 冊子内に紙片があり、「私注は序のみ、本文に私注あらず(宮崎2005 9/12)」と記載されている。

(3) 井上正一九八四、山下立一九九六に妙楽寺について言及がある。井上論文に引かれる『妙楽寺縁起』(九条兼孝筆・寺蔵)によれば養老三三年に行基が開山し、延暦十六年に空海が再興したことが伝えられるという。

(4) 覚明、信救とも。太田次男一九七二参照。

(5) 三木雅博一九八五による。このほか新日本古典籍総合データベース <https://kotenseki.nijl.ac.jp/> (二〇二〇年一月一日閲覧) に写本・刊本八点を数える。

(6) 以下、アラビア数字は本稿末尾の「注記付き一覧」に記した、川口久雄・

志田校注『日本古典文学大系第七三 和漢朗詠集・梁塵秘抄』岩波書店、一九六三に掲げる歌番号に対応する。資料に現れた仮名音形は()内に記した。

(7) 参考までに『和漢朗詠集』と同様に詩文を収録した『本朝文粹』の調査(柏谷嘉弘一九八七、四三五頁)を記せば、願文・諷誦文など仏教関係の巻を除くと漢音読みが大多数とある。

(8) 専修大学図書館蔵建長三年(一二五一)菅長成書写本は専修大学図書館蔵古典籍影印叢刊、一九八一によった。正慶元年(一二三三)校点本は複刻日本古典文学館による影印、一九七五によった。

(9) 国会図書館蔵本は桝尾武『国会図書館蔵和漢朗詠集 内閣文庫増和漢朗詠集私注漢字総索引』新典社、一九八五)によった。

*本資料の調査にあたっては、國立臺灣大學圖書館特藏組(二〇一九年八月当時)の周嘉瑩氏に格別のご配慮を賜った。記して篤く感謝申し上げる。